

## 文化

## 知られざる ユング



「無意識との対決」「自己客観視」の両極

今年、分析心理学を確立したスイスの心理学者、カール・グスタフ・ユング(1875～1961)の没後50年にあたる。昨年、半世紀以上も封印されてきた著書「赤の書」が刊行され、これまでのユング像の見直しと再評価が進みつつある中、京都でシンポジウムが開かれた。

命日の6月6日を前にした4、5日に、京都大であった日本ユング心理学会。初日の一般向け企画で「赤の書」編者であるソヌ・シャムダサーニさんが記念講演した。

第1次世界大戦直前に、ヨーロッパが血の海になるイメーシ(ビジョン)を見て精神的危機に陥ったユングは、自分がみた夢などに現れた人物と対話する自己実験

## 没後50年 京都でシンポ



講演するソヌ・シャムダサーニさん(左)と河合俊雄・京大教授＝日本ユング心理学会提供

「無意識との対決」を始め、その記録を「黒の書」にまとめた。さらに詳細なビジョンの絵と解釈を加えたものが「赤の書」だ。ユングの遺志で長年非公開とされてきたが、昨年刊行され、全世界で10万部近く売れている。

講演でシャムダサーニさんは、ユングのインタビュー記録や、彼

の葬儀の写真など未公開資料を紹介しながら、同書の成立前後について説明。これまで、ユングが孤独に進めたと思われていた「無意識との対決」という作業が、じつは周囲の協力者である人々との交流の中で行われていたことを明らかにした。

その一方で、交流していた周囲の人々が芸術や文学に流れていく中で、あくまで自分の体験を批判的に見る心理学的な視点を保ち続けたことも強調した。

その理由を「赤の書」日本語版(創元社)監修者の河合俊雄・京大教授が続いての討論で聞くと、シャムダサーニさんは「ユングは予言者のようなビジョンに客観的に脚注を付けているが、これは自分の表現したことの意味をきちんとわかりたいという意志が強かったからだ」と説明した。

ユングが赤の書を出版しなかった理由も、「(赤の書で)自分の体験で理論を証明するとそれは自己暗示かもしれないので、体験をベースにしつつも、後半生であくまで宗教や民族学を素材に使用自分の理論を実証しようとしたのではないか」と語った。

河合教授は、今回のシンポジウムを振り返り、孤独の中で狂気と戦いながら自らの心理学を打ち立てたという従来のイメーシとはかなり異なるユング像が示されたと指摘する。「ユングを神秘主義者とする見方も強いが、批判的視点や科学へのこだわりはその見方を覆すものだ。周囲と一緒に行動しつつ独自であったこと、無意識のイメーシを統合しつつそれから自分を区別することなど、両極を生きたユング像がますます明らかにいった」(久保智祥)